

## オスマン朝期アレppoにおける都市空間と地方行政

### Urban Space and Local Government in Ottoman Aleppo

シュテファン・クノスト Stefan KNOST

(日本学術振興会外国人特別研究員/東洋文庫特別研究員)

東洋文庫での研究生活において、私は「オスマン都市の自治的行政組織：タンジマート期以前のアレppo」という研究課題のもと、主として街の中での街区（マハッレ）の組織や役割についての研究を行った。これらの実体がいかに構築され、いかに自らと自らの果たす機能を定義していくのかを確定することが本研究におけるアプローチの一つだった。

今日は、「空間（space）」概念という、都市研究への新たなアプローチの枠組みから本研究の成果について報告を行う。まずはこの空間概念を規定し、その後、いかにして都市空間は①イスラームの宗教寄進財産（ワクフ）②街区（マハッレ）neighborhood<sup>1</sup>及びその制度③宗教を介しての共同体（モスクに帰属する共同体など）の三つの都市制度の助力によって創られたかを問うていきたい。

なお、③については2007年1月に取り上げて報告を行ったので<sup>2</sup>、今回は詳細には取り上げない。本研究では主として現在ダマスカスの歴史文書館に保存されているアレppoのシャリーア法廷（イスラーム法廷）台帳を史料に用いた。

#### はじめに：「空間」という概念

この十年間に社会科学の分野では、概して「空間論的転回spatial turn」と特徴づけられるある動向が生じている。これは科学的関心の対象としての「空間」の”再”発見であり、「空間」という概念だけではなく、1974年刊行の著名な『空間の生産』<sup>3</sup>*La production de l'espace*において、「空間」というタームを、物質的な外形に取り囲まれた空地とする幾何学的もしくは建築学的な理解のあり方を打破し、社会的なカテゴリーとしての理解へと移行した仏の哲学者アンリ・ルフェーブの再発見でもある。

ドイツの社会学者マルティナ・レーヴはルフェーブの概念を発展させ、「空間」を「生活する人間と社会財の関係性による規制」と定義した。そこで、生活する人間と社会財は、一つの総合化によって、認知・観念化・想起の過程を経て「空間」に統合されていく。「容器としての空間(container-space)」概念を放棄することで、競合し重なり合う「空間」と「空間の認知」の存在は想像されうるようになる。この理論の枠組みに従い、私の研究において、「都市空間」とは、都市を定義し、構築し、特定の規範や法や行為や独特の都市建築によってその周縁から隔てる、「空間」のあらゆる重層的な認知・構成であると理解される。また、ここにおいて「地方行政 local government」とは、非常に普遍的な意味合いで、都市の制度を機能させていく全ての行為と理解されるものである。

#### アレppoにおける都市空間

では、アレppoにおける「都市空間」の特性とは何であろうか？以下では、その「都市空間」の3つの

<sup>1</sup> 隣人という関係性に基づく集団であるが、具体的には街区（マハッレ）住民を指しているので報告者と相談の上「街区（マハッレ）」の訳語で統一した。

<sup>2</sup> 2007年1月27日イスラーム地域研究東洋文庫研究会。報告は以下のサイトに掲載。

[http://www.tbias.jp/php/investigation\\_detail.php?year=2006S#0127](http://www.tbias.jp/php/investigation_detail.php?year=2006S#0127)

<sup>3</sup> なお、斉藤日出治による和訳が青木書店より2000年に刊行されている。英訳*The production of space*は1991年に刊行されている（原典は仏語）。

側面を提示する。空間とは人によって創造されるものである。そこで、ここではアレppoという都市の形成に深く関与した3人の伝記も紹介する。

## 1. ムディーネ(M'dine):ワクフ(宗教寄進財産)と、帝国の空間

アレppoのある部分は、オスマン朝期に一大変容を遂げた都市空間として選別することが出来る。それがいわゆる「ムディーネ」、アレppo中心部の巨大な市場区域である。

(ムディーネには) 1544年から1583年までの間に四つの巨大な寄進財産が設立された。もちろんこれは16世紀の経済的・人口統計学的な急伸長に関連して行われたものがある。寄進財産設立者は皆オスマン朝の高官で、四人中の三人はアレppoの総督であった。これら四人の設立者たちは、この多大な投資によって、アレppoをオスマン帝国に統合し、そしてこの統合を目に見える形にしようと目論んだのである。これら四つの寄進財産のうち三つには、中心に、ドームを中央に据える典型的なオスマン朝期様式の金曜モスクがあった。残り一つ、大宰相ソコルル・メフメット・パシヤ Sokollu Mehmed Pasha によって設立された寄進財産は、ハーン・アル・グムルク Khan al-Gumruk を中心としてその周辺に設立された。

### 人物1. ソコルル・メフメット・パシヤとハーン・アル・グムルク

ソコルル・メフメット・パシヤは1506年にボスニア東南部のボスニア・セルビア系家庭に生まれ、デヴシルメ(訳注:オスマン朝宮廷に奉仕する奴隷を徴用するもの。バルカン半島で行われた)によってイエニチェリ(訳注:オスマン朝常備歩兵軍)として奉仕すべく幼年時に連れ去られた。彼はオスマン朝で出世を果たしついにスレイマーン大帝、セリム二世、ムラト三世の三代のスルターンのもと大宰相を務めるに至り、約15年間、実質上の支配者としてオスマン帝国を統治した(任期:1565-1579年)。

1574年に彼はかつてオスマン帝国内で設立された中でも最大規模のワクフを設立した。その寄進財産の多くは彼の出身地であるバルカン半島にあるが、帝国内の他地域にも設立されている。シャーム Bilad al-Sham の寄進財産(アレppoとシドンにハーンが二つ、そしてイスケンデルンのパヤスなどにタキーヤ付きの新港)を調べてみると彼の寄進の一つの目的が明らかになる。それは、第一に、アラブの領域を開発し、第二に、アラブを中央により近く結びつけようという企図であり、帝国の領域的な求心力拡大に向けての重要な一歩を表すものである。また同じく、彼の寄進は、寄進者ソコルル・メフメット・パシヤが、軍事遠征と入念かつ巧妙な外交戦略によってのみならず、空間の創設によってその強化を目論んだ「帝国の空間」の認知を証明するのである。

## 2. 都市空間としての街区(マハッレ):街区(マハッレ)の長と街区(マハッレ)の寄進財産

### a. 街区(マハッレ)の長

アレppoの例で言えば、街区(マハッレ)の長は「イマーム」と称される(モスクのイマームとは別)。アレppoの場合のイマームの職能は未だあまり明らかではないものの、彼は、特に税や他の賦課金の問題において、他の都市の組織に対して街区(マハッレ)を代表する存在であり、中央政府への税であるアヴァーリズ税 *avariz divaniyya tax* や地方権力者(州の総督など)への慣習税 *tekalif-i urfiyya* といった賦課金を徴収する責務を負っていた。アレppoでは、イマームはイスラーム法官(カーディー)によって任命されていたが、大抵は街区(マハッレ)の住民(中の年長者たち)によって選ばれていた。大きな街区(マハッレ)では、組織全体が、彼のその業務を代理(*kethuda*)や徴税人(*lammam*)によって補助していたようである。

いくつかの—不幸にも少数ではあるが—文書には「街のシャイフ *shaykh al-balad*」と呼ばれる官吏が登場する。我々が持つ僅かな情報からでは、その職能の全てを確定することは出来ないが、この官吏はアレppoに少なくとも17世紀半ばから18世紀半ばまでは存在し、街区(マハッレ)のイマームたちとオスマ

ン朝の官僚の間の仲介役と同じく、徴税業務に関わっていたようである。というのは街区（マハッレ）のイマームがこの官吏の任命に関与しており、またこの官吏は街区（マハッレ）の寄進財産からなる基金から給与を受け取っていたからだ。

#### b. 街区(マハッレ)の寄進財産

街区（マハッレ）の制度の第二は、街区（マハッレ）の寄進財産である。西アナトリアでは「アヴァーリズ税のためのワクフ（*waqf-i avariz*）」と称されており、これらの地域において、その主目的は街区（マハッレ）の貧しい成員への税金の負荷を解消することにあった。これらの税が集団を対象とする特性を持っているために、貧しい住民の分は他の世帯が負ったのである。

18世紀中葉からの7つの街区（マハッレ）の寄進財産の会計台帳（*muhâsabât*）によれば、アレppoではこの街区（マハッレ）の寄進財産が他の業務においても幅広い範囲をカバーしていたことがわかる（表1.）。

保安のための街区（マハッレ）内業務への支出のほか、諸税（*‘awârid* や *dhakhîra* など、元は総督が彼らの在地軍のために徴集した類の税）やその他のものに加え、歳入の一部は、総督の邸宅の保安や水道施設の維持など、街区（マハッレ）外の業務のために用途が定められた。

### 3. 都市の宗教空間:モスクに帰属する共同体とスーフィー教団

「街区（マハッレ）の寄進財産」は一般的な発想としては法学者の著作にすでに存在する。彼らは「街区（マハッレ）」の慈善のための寄進財産について言及しており（*al-waqf ‘ala fuqarâ’ jirânihi*）、さまざまな「モスクに帰属する共同体」から構成される都市の宗教的構造に基づいた「街区（マハッレ）」の概念を発展させている。この場合、「街区（マハッレ）の成員たち」と寄進財産の受益者たちとは、彼らのモスクのアザーン（礼拝の呼びかけ）を他のモスクのそれより、より大きな音声で耳にする者全てである。こうした寄進財産はその区域の「自由民も、奴隷も、女も、男も、ムスリムも、ズィンマの民（キリスト教徒やユダヤ教徒）も」全住民に同じ程度に資するものである。

アレppoのいくつかの区域では、街区（マハッレ）は、徴税単位であると同時に、まさに法学者たちがそう定義したように、宗教的な統一体として認識されている。

これらの均質性のある街区（マハッレ）のほか、例えば、ジャッルームの比較的大きな街区では複数の宗教的組織を有していた。この場合、宗教的な所属に基づいて共同体の分布図を描くことは難しい。ジャッルームは行政的には一人の街区（マハッレ）のイマームをもち、一つの街区（マハッレ）ワクフを有し、なおかつ複数の宗教共同体から構成されている、一つの街区（マハッレ）であった。

特に、アレppoのスーフィー教団はしばしばその影響力を街区（マハッレ）の境界を越えて伸長させた。

#### 人物 2.「偉大なるシャイフ」シャイフ・イブラーヒーム・アル・ヒラーリー:「スーフィー教団による空間」の構築

- ジャッルーム街区（マハッレ）のヒラーリー一族のザーウィヤ（修道場）は恐らくヒジュラ暦 1000 年/西暦 1590 年頃に設立された

- シャイフ・イブラーヒームの時代までに、この一族とザーウィヤはアレppoに確立していた。

- シャイフ・イブラーヒームはヒジュラ暦 1155 年/西暦 1724・25 年にダーラト・イッザ *Dârat ‘Izza*（アレppoから 30km 西の地名）にて生まれた。

- 彼は、アレppoのこのザーウィヤで伯父のシャイフ・ムハンマド・ヒラーールの元で勉学を行った。

- ヒジュラ暦 1178 年/西暦 1765-66 年～ヒジュラ暦 1198 年/西暦 1783-84 年に、彼はカイロのアズハルにて学問を修め、ハルワティー教団 *Khalwatiya brotherhood* に加入した。

- ヒジュラ暦 1204 年/西暦 1789-90 年に彼は伯父の跡を継いでシャイフとなった。

- 彼の存命中に、ザーウィヤの利益のために非常に多くの宗教寄進が行われたことから、アレppoのスーフィー社会における彼の重要性・影響力が見て取れる。

- 何人かの門弟はアレppoのさまざまな場所にザーウィヤやスーフィーの系統を確立した。

・ シャイフ・イブラーヒーム・アル・ヒラーリーは、さまざまなモスクに帰属する共同体の間に、街の教区制組織に類似した、カーディリー・ハルワティー教団での（シャイフと門弟 *murīd* との）個人的な関係性に基づく、複数の中心をもつ宗教的「スーフィー教団による」空間を構築した。

### 人物3. 宗教空間と商業利益: シャラフ・ジャーミー (Jāmi' Sharaf) のイマーム、シャイフ・ハサン

シャイフ・ハサンについてはあまり情報が伝わっておらず、彼の伝記を再構築することも出来ない。彼は主要なウラマー族の出ではなく、また恐らく商業的な名門一族の出でもないだろう。しかし、法廷台帳の文書にはいくらか情報がある。

・ 西暦 1800 年ごろ、彼（シャイフ・ハサン）はアレppo北部郊外にあるシャラフ・モスクのイマームであり、ハティーブだった。この地位により、彼は確固たる名声を得た。というのは、「シャラフ・ジャーミーのイマーム」というラカブ（尊称）は、彼がその地位において何もしていないときにも彼に付されているからである。

・ ヒジュラ暦 1207 年/西暦 1793 年に、彼は自分の子孫の利益及びシャラフ・モスクでの読誦のため、ハッザーザ街区（マハッレ）の一家屋 (*dār*) にワクフを設定した。恐らく、彼はシャラフ・モスク近隣に位置するその家屋に居住していたのだろう。

・ その宗教的な活動（訳注：モスクのイマーム）にも関わらず、彼はこの地域のキリスト教徒住民に関わる多くの文書に登場している。彼は、キリスト教共同体に関連する事例においては、証人ないしは法定代理人 (*wakil*) として行動している。

シャイフ・ハサンは、アレppo北部郊外において、ムスリム商人・キリスト教徒商人の利益を巡っての橋渡しをする、諸宗派共同空間に関わっている。この空間の複数の中心は、アレppoのこの地域の、シャイフ・ハサンが活躍するモスクであり、ザーウィヤである。

### 結び

イスタンブルの街区（マハッレ）（18・19 世紀のカサブ・イルヤス・マハッレスィ）を研究しているジェム・ベハール (Cem Behar) はこのように書いている。

「マハッレ」とは本質的に、地方行政単位である「区」である以前に、網の目のような人間関係によって規定される都市のなかの基礎的共同体であった。

彼の研究はこのような摘要を含む。彼のイスタンブルの街区（マハッレ）は、モスク（または教会やシナゴグ）の周りに組織された行政・社会・宗教単位である。このことはたぶんアレppoのいくつかの街区（マハッレ）についても言えるだろう。今のところ我々の知識はこの問題に最終回答を出せるまでには至っていない。しかし、多くの場合、それらは街がきちんと保たれるよう支援する幾多の異なる関係性から組み上げられた多層空間であるようだ。大抵「共有空間」とは、隣人たちとその同一の生活空間を共有する者とは限定されるわけではない。

ここで用いられた「空間」の概念は、オスマン帝国の都市史を研究する上で非常に有効である。これは、イスラーム都市の構造について、それを独立の関連性の無い街区（マハッレ）の集積とした古き「オリエンタリズムの」発想を是正する一助となるだろう。